

老舍『微神』試論

渡 辺 武 秀*

On Lao shê (老舍)'s "Wei shên (微神)"

Takehide WATANABE*

概论

老舍の初期作品大都是被称做“幽默作品”。比如《老张的哲学》(1926)、《赵子曰》(1927)等。但是1934年发表的《微神》却没有一点儿幽默因素了,从头到尾都是悲惨的内容。所以这篇《微神》可以叫做“悲剧作品”。

我认为,老舍的“悲剧作品”的代表作是《骆驼祥子》(1936)、另外可以称做“悲剧作品”的还有《月牙儿》(1935)等等。那老舍是从“什么时候”开始写“悲剧作品”的呢?。老舍的最早的“悲剧作品”是哪一篇呢?现在我还不清楚。这篇《微神》呢?我认为,它在老舍的“悲剧作品”中可能是最早的作品之一。所以要研究老舍的“悲剧作品”,就应该从这篇《微神》开始。

《微神》里描述的内容是爱情的故事、爱情的悲剧。所以我认为,如果研究老舍怎样创作悲剧,我们就应注意“爱”的因素。本文中,我想分析一下这篇作品里的“爱”的因素与“悲剧”有什么关系、在“悲剧”里如何起作用。

这个作品的“爱”本身就是主人公和他情人的不幸的一个原因。他们越“爱”越不幸。很奇怪。“爱”原来不是这样。为什么会这样呢?怎么会有这样的结局呢?

我在这篇文章里详细地解释《微神》的悲剧结构。

Keywords: tragedy, woman, love

序

老舍の『微神』は一九三四年の「文学」第一卷第四期に発表されたもので、後に同年九月に出版された短編集『趕集』(良友図書公司)に収められている。

ところで、老舍の初期の作品は「ユーモア作品」と呼ばれることがある。例えば『老張の哲学』(1926)『趙子曰』(1927)という作品にはこの傾向が強い⁽¹⁾。だが、この『微神』になると一片の「ユーモア」も見あたらなくなってくる。作品中にあるのは暗く沈んだ悲劇の内容だけであ

る。もともと「ユーモア作品」と呼ばれるものにも「悲劇」的要素はあるにはあった⁽²⁾。だが「ユーモア」的なものが完全に払拭され「悲劇」そのものを中心に置いた作品ということとなると、この『微神』以前には見あたらないように思われる。そしてこの作品の後に、例えば『月牙兒』(1935)『駱駝祥子』(1936)のような幾つかの「悲劇作品」が連なっているように見える。

このように老舍は、ある時期から「ユーモア」的傾向の作品のほかに「悲劇作品」を書き始めている。その「ある時期」というところに、この『微神』があると思えるのである。

また、「『微神』の女主人公の形象と“彼女”の悲惨な運命は、老舍が多くの作品で描いている婦女の形象と多くの共通点と深い関係を持って

平成11年10月15日

* 総合教育センター・助教授

いる。だから『微神』の“彼女”は、老舎が描く様々な婦女の形象の原点であり、基点であるといえることができる」⁽³⁾という伊藤敬一氏の指摘もあり、これから老舎の作品の中での、この『微神』の重要な位置が窺える。

そこで、この小論では、この『微神』の「悲劇」がどのようなものであるかということを考えてみたいと思っている。そして、この作品は「愛」をテーマにした作品であるから「悲劇」を考えるとすることは、結局「愛」というものが「悲劇」とどう関わっていくのかを考えてみることになる。

最初に、この作品の全体の構成を簡単に述べておきたい。

伊藤敬一氏は『『微神』と老舎の文学』⁽⁴⁾という論文で、この作品を以下の五つの部分に分けている。

- 1) 第一段：「春の花園」
- 2) 第二段：「夢の前方」
- 3) 第三段：『「私」の回想』
- 4) 第四段：『「彼女」の陳述と訴え』
- 5) 第五段：「プロローグ」

これで作品の大まかな構成が理解できるのではないか。本論文も伊藤氏のこの分け方に沿って分析を進めていくことにする。

第一段や第二段は、伊藤氏が詳細に分析されているように、非常に象徴的な言葉が使われ、読者を徐々に幻想的な世界に引き込んで行く部分である。

作品は清明節も近いある日、主人公であり、語り手でもある「私」が墓地の見える小高い場所にて、寝るでもない醒めるでもない、そんな境界の中で、ある幻想の中に入って行き、そこで「愛」の物語が始まる。

そしてその「愛」の物語は、第三段の『「私」の回想』と第四段の『「彼女」の陳述と訴え』の部分にある。この第三段、第四段には、「私」と

「彼女」との、十七歳時の愛の交流のエピソードから始まり、しだいに二人が離ればなれとなり、あぐくの果てに「私」は一人で南洋に行ってしまう。中国に残された「彼女」は他の男性と結婚するが、その男性とうまくいかず離婚。その後金持ちの御曹子とも結婚するが、この人物ともうまくいかず、とうとう娼婦に墜ち、最後には自殺するといった内容の話がここに置かれている。

本論文では第三段、第四段を中心に分析していくことになる。この部分を、伊藤論文では、この作品が老舎の初恋を扱ったものという前提で、老舎の経歴から照らし、事実関係、実際の時期とのずれというものから、この作品のフィクション部分を明らかにし、そこから老舎の創作意図を読み解こうとする⁽⁵⁾。この分析方向は、本論文の方向とは幾らか違っている。

最後に置かれている第五段の「プロローグ」は三分の一ページほどである。葬式の行列が遥か彼方を通って行くのが見える。この場面の「紙銭が撒かれ、蝶のように麦畑に降りていく。」⁽⁶⁾といったものは、伊藤論文も指摘しているように、まさに老舎の有名な話劇『茶館』(1957)のラストシーンを彷彿させる。最後は「心の中は茫然としていた。ただあのひと揃いの緑色のスリッパを思い出していた。それはふたつの木の葉が、永遠に生きている樹木の上で春の夢を見ているかのようだった。」⁽⁷⁾という象徴度の高い言葉で終わっている。

また創作手法について、伊藤氏は「私は『微神』この作品も老舎先生がヨーロッパ文芸の新しい象徴主義手法を完全に自分のものとし、自分の創作に巧みに運用した、一篇の注目すべき作品であると思う」⁽⁸⁾と述べる。この指摘の中の「象徴」という言葉からも察せられるように、この作品は非常に象徴的な言葉が多く用いられ、寧ろ一篇の詩のような印象さえ受けるものである。

二

次に、この作品を分析する前に、まず、この論文で行おうとすることをさらにはっきりさせるためにいささか結論めいたことから始めたい。

この短編小説『微神』の主人公は「私」という人物で、他には「私」の恋の相手である「彼女」だけが登場する。物語は主に「私」の回想として語られ、その内容は「私」と「彼女」の「愛」の物語であるということが出来る。

この作品の「私」と「彼女」は少年少女のころから深く愛し合っている。にもかかわらず、「私」と「彼女」は結ばれない。そればかりか、やがて「彼女」は娼婦になり、肉体的にも精神的にもぼろぼろになり、ついには自殺をしてしまうという悲惨な結末を迎える。

なぜこのようになってしまったのか。

こうなるには、もちろん社会的な要因も関係している。この作品の時代背景は民国、それも五四運動以前であり、その時代の社会で女性がたった一人で家族を養って生きて行くのは困難きわまりないことが充分想像される。だから当然、この作品でも、彼女が不幸に落ちて行く際に、女性をそのようにしてしまう要因が、社会にしっかり組み込まれていることは諒解できる。だが、この作品を理解するには、このことを諒解した上で、さらに「彼女」が悲惨な結果に落ちて行く際の、その不幸への「愛」の関わり合いというものをも見逃せないのである。

というのは、この作品においては、まさに「二人は愛し合っているからこそ結ばれなかった」となっているように見えるからであり、そしてさらに「二人が愛し合っていたからこそ“彼女”は娼婦にならざるを得なかった」し、最後には「自殺をするしかなかった」となっているように考えられるからである。つまり、「愛し合っている」このことが、「私」と「彼女」をしだいに悲惨な結果の方向へ導いて行く展開になっているように思えるのである。こうであるが故

に、なおいっそう「彼女」の運命も悲惨な感じがするのではないか。

だから、もし「愛し合っていること」が悲惨への転落の原因というのであれば、老舎文学を理解する上でその悲惨へと落ちて行く時の落ちて行き方を明らかにしてみる価値はあると思う。というのは、そこに老舎の「愛」の理解の仕方があって、なによりもこのような展開こそが老舎作品の「悲劇」の根底に横たわっている重要なものであるように思われるからである。

三

第三段の「『私』の回想」を分析していく。

この第三段は、十七歳の頃の出来事が冒頭に置かれ、以後、「彼女」とのいくつかのエピソードが時間を追って書かれている。それらのうち次に引用したエピソードが「私」と「彼女」との「愛」の物語の冒頭に置かれているものである。この場面は作品全体の効果から見れば、作者がここで二人が「愛し」「愛され」ているという印象をしっかりと読者に与えられるかどうかの極めて重要な部分である。

○〈十七歳時の、二人の交流〉

「私」が十七歳の時、「彼女」の家に行くと、その日は偶々「彼女」の両親が居なかった。「彼女」は「私」が来たと知って、猫が遊び道具を目の前に見つけたかのように部屋から勢いよく飛び出してくる。次の引用がまさにその部分である。

彼女のお父さんお母さんが家にいる時、彼女はただ窓越しに私をちょっと見るだけだったし、或いは口実を見つけて私が彼女の処へ行った際には、私にちょっと笑いかけただけだった。今回は、彼女は子猫が面白い遊び道具に出会ったみたいだった。私はこれまで彼女がこれほど活発にすることが「できる」なんて知らなかった。一緒に部屋の仲間で歩い

て行く時、彼女の肩が私の肩に触れた。私たちは両方とも十七歳になったばかりだった。二人とも何も言わなかった。でも四つの目がそれぞれ私たちが千万ほど嬉しいということを告げていた。……（略）……心の中に尋ねたいことは沢山あった。ただ、口が何かの力で封をされていた。私は彼女もそうだとすることが分かっていた。というのは彼女の白い喉がずーっと小刻みに震えているのが見えていたからだ。まるで関係のない言葉を飲み込もうとし、話すに値するものもまた言うのは恥ずかしいというふうだった。⁽⁹⁾

この二人は十七歳とはいえ、言葉を越えた深いところでお互いを理解し合っているといえる。たとえ言葉を発しなくとも、自分も愛しているし、相手からも愛されているということをお互いがわかるのである。

だが、この喜びが大きければ大きいほど、この喜びを打ち壊すものに対する恐怖もまた大きくなる。二人の幸福な時間を打ち破るような誰かが来はしないだろうか。この不安が襲う。

時々、彼女はチラッと窓の外を見た。おかた誰かが入ってこないか恐れているのだろう。誰もいないことをしっかり見て取ると、彼女の顔に映った花影は喜びで紅く染まった。彼女の両手はかわるがわる小さな背もたれの椅子の端を撫でていた。はっきりと耐え難さを表していた。それは喜びの耐え難さだった。ついに、彼は深々と私の目を見、絶対に言いたくないのだが、言わざるを得ないというふうにして「帰りなさい!」と言った。⁽¹⁰⁾

「走吧! (帰りなさい)」という言葉が発する。この場面で発せられた言葉はこの一言である。それにしてもこの言葉に込められる「彼女」の気持ちは非常に複雑である。

この場合の「走吧!」という言葉が相手を嫌

いで言ったものでないことは改めて言うまでもない。また彼女自身が、本当は「私」が訪ねてきたことが迷惑であるというものでない。「彼女」は「私」を深く愛しており、寧ろ両親が不在の時にやってきた「私」を歓迎しているし、「私」を帰したくないのである。こういう気持ちの中で発せられた言葉なのである。

だからこの「走吧!」は「私」を「愛している」が故にこそ発せられた言葉であると考えべきものである。そして「愛している」が故に、もし誰もいないところに二人でいるところを他の人に見られてしまったら相手が困ったことになるのではないかと彼女は「私」のことを心配しているであり、それから引き起こされる最悪の事態を恐れているのである。

しかし、たとえ気持ちはそうであったとしても、「走吧!」という言葉は二人を引き離す方向へと作用する。相手のことを「愛していればいる」ほど、相手のことを「思いやればやる」ほど「走吧!」と言わざるを得ず、だが、そう言うてしまうことで、結果的には二人が「結ばれない」方向へと進んでいくことになる。ここにはこの種の悲劇が存在している。この二人の気持ちと実際に生み出される結果とが、まるで正反対になってしまうのである。

それは「私」や「彼女」が生きている時代、所属しているに社会に「愛している」からこそ、つまり愛情の表現として「彼女」に「走吧!」と言わせてしまうものが存在し、また「私」が「彼女」を「愛している」からこそ、その「走吧!」を聞き、心の中では去りたくはないのだが、去らざるを得ないと決心してしまうものがあるからである。

○〈二十二歳の時、「私」が校長になる〉

二人は次第に大人になっていく。この過程の中で、幾つかの二人の交流が描き出されている。次はその、幾つかの中の、「私」が学校卒業と同時に校長になった時のエピソードである。校長就任を祝って「彼女」から手紙が来る。

私は卒業してすぐ小学校の校長になった。これは私の生涯における最大の光栄になった。というのは彼女が私に一通の手紙をくれたからだ。手紙の末尾に一枝の梅の花が描かれており、彼女が「返事はいりません」と注をつけていた。私も敢えて返事を書くようなことはしなかった。しかしまるで私は心の中で火の束が燃えさかっているかのようだった。そのありったけの力をふりしぼって学校のことを行った。私は学校をきちんと修めることを彼女への返信とした。彼女は夢の中で私に勝利の拍手——あの腕さえも玉である手で——をしてくれた。⁽¹¹⁾

「彼女」の「愛」の表現、それに対する「私」の返答の仕方がここで表現されている。

ここでのお互いに対する「愛」の表現は十七歳の時と基本的には変わらな。

手紙に「彼女」は「返事はいりません」と書いているが、では本当に「返事がいらな」というと、実はそうではないのである。むしろ返事は欲しいのである。また「私」も返事を出さなかったが、真から返事を出したくないのではない。本当は返事を出したかったのである。

ではなぜ「彼女」は「返事はいりません」と手紙に書き、「私」は返事を書かなかったのか。

その最も大きい理由は、返事を書くことで「彼女」は「私」が困ったことになることを恐れているのである。例えば「彼女」は、結婚もしない女性と交際していることが明らかになれば「私」の校長の座が危うくなるかもしれないと心配しているのである。一方「私」の方も返事を書くことで「彼女」に迷惑が掛かることを恐れていると考えてよい。決して校長としての自分の名誉に傷が付くと考えてのことではない。二人はあくまで相手のことを思いやっているのである。

つまり「彼女」が「返事はいりません」と書いたのは「私」に対する愛情から出たものであり、一方「私」が返事を書かなかったのも、や

はり「彼女」に対する気遣いから出たものであると考えるべきものである。

「私」も「彼女」のことを大事と思っているし、「彼女」もまた「私」のことを想っている。二人はお互いに深く愛し合っている。深く愛し合っているから、相手を思いやり気遣う。だが、この思いやり気遣いは、恋の成就にとって、何の役にも立たないのである。いや役に立たないばかりか、この思いやり気遣いが、却って恋の成就の障害になっているのであり、互いを引き離す方に作用しているのである。

ともかくこのような愛情表現のままであれば、「彼女」とは精神的には結ばれていたとしても、現実の世界では結ばれることはない。

○〈結婚の障碍〉

二人の愛情表現が二人を引き離す方向に作用しているにしろ、もし公明正大にかつ正式に結婚すれば、おそらく、あたかも何ら問題がなかったかのように、ハッピーエンドに終わることになる。だがその公明正大な方法による結婚の道が閉ざされたとき、もし二人の愛情の表現の仕方が相変わらずこのままであり続けられれば、二人の「愛」の運命はさらに残酷なものになることは疑いなのである。

作品はまさにこの方向で進んでいく。正式に結婚を申し込むことの不可能さについて以下のように述べられる。

結婚の申し込みは考えられないことだった。多くの、とっても多くの、気づかない、力のある障碍があった。それはまるで力を頼みにする猛々しい凶暴な虎のようであり、それが我々の間に立っていた。⁽¹²⁾

障碍がどんなものであるのか具体的には書かれていない。ただ巨大な、猛々しい障碍があるというのみである。これによって公明正大に直接結婚の申し込みができないという事実がはつきりする。

ただ正式に結婚を申し込む道は閉ざされていても、二人が同じ地域に住んでいれば、「互いに愛し合っている」のだから、それでも幾らか二人が偶然に出会う、話をする可能性は残っている。だとすれば、まだ二人が結ばれる希望だってないことはない。

だが、作品はさらにこの可能性さえも打ち消す方向へと展開していく。「私」が「南洋」へ行ってしまうのである。「私」が南洋に行き、「彼女」が中国に残っている。この条件の下で、果たして二人の愛はそのままの状態であり得るのか。

○〈「私」の南洋行き〉

「私」が南洋に行っている時、「彼女」とどのような交流がなされたのか。これについて書かれているのが、以下である。

国外にいる何年間のうちに、彼女の消息を聞く術がなかった。直接手紙を出すのは不可能なことだった。間接的に聞くのも具合が悪かった。だから夢の中で会うより仕方がなかった。⁽¹³⁾

南洋に行っても彼女に手紙を出すこともなく、彼女の消息を間接的に聞くこともない。このやり方はこれまで取ってきた「私」の「彼女」に対する愛情表現の延長線上にあることは明らかである。

手紙を出さず、消息も聞かないのだが、だからといって「私」が「彼女」と交際したくないと思っているのではなく、まして「彼女」がほかの男性と結婚して欲しいと願っているわけでもないのである。手紙を出さず、消息も聞かなくとも、それでも心の中ではやはり「彼女」のことを想い続けているのである。

○〈帰国後〉

帰国後すぐに「私」は積極的に彼女に接近を図る。ところが「彼女」の消息を尋ねると、「彼女」が「私娼」をしているというショックな情

報が伝わってきた。

それでも「私」はむしろ「彼女」に会いたいと思ったし、「彼女」を助けたいと思った。そう思って「彼女」の家に行くが、すでに嘗て住んでいた家は売られ、「彼女」の姿はなかった。ここであきらめず、八方手を尽くし、結局は探し出した。

そして、その再会の様子が以下である。

結局私は彼女を捜し出した。彼女は既に前髪を切り、後ろの方に結っており、首の後ろのところには大きな緑の簪があった。赤色の長い旗袍を着ており、袖は僅かに肘まで達していた。二の腕は既に以前のあんなふうな柔らかさはなかった。顔の白粉は厚く、額と臍には皺があった。少しの活発さもなかったのだが、それでも彼女は笑うと綺麗だった。だが、もし白粉と油を取り去ってしまったら、彼女はおそらく良くっても産後の病婦といったところだろう。始めから終わりまで一度も私を正視することはなかった。顔には決して恥じらいの様子はなく、確かに彼女は話もし、笑いもしたのだけれど、ただ心は話や笑いの中ではなく、完全に客として私につきあっているかのようなようだった。私は試みに彼女の問題と経済状況をたずねたが、彼女は余り答えたがらなかった。彼女はタバコに火を着け、煙は素早く鼻から出てきた。⁽¹⁴⁾

このように表面上は明らかに娼婦の服装、態度であり、終始私に何の感情を表すことはなかった。「彼女」はすっかり変わってしまったのである。しかも、少なくとも表面上は「彼女」の「私」に対する愛の心は消滅してしまったように見える。

それでも友達を通じて「私」は強引に「彼女」に結婚を申し込む。しかし「彼女」狂ったように笑うだけでなにも返事はしなかった。それで今度は自ら正式に結婚を申し込みに出かける。だが会えなかった。何度か「彼女」の家に行き、

四度目に彼女の家に行ったとき、「彼女」の部屋の中に小さな棺桶があり、その中に「彼女」が収められていた。墮胎の失敗で死んだということだった。

以下は「私」の回想の最後の記述である。

一籠の、花びらに私の涙が落ちている、とっても新鮮な玫瑰が、彼女の霊前に置かれた。私の初恋はおわった。でもなぜ彼女はこのような境遇に落ちてしまったのか？このことを私はもう尋ねたくはなかった。どのみち彼女は心の中に永遠に生きていいるのだから。⁽¹⁵⁾

「彼女」はどうして娼婦になってしまったのかについては何も語らなかった。何も語らずに墮胎の失敗で突然死んでしまう。

第三段では「私」が南洋に行っている間になにが起き、何故「彼女」が娼婦になり、墮胎の失敗で死ななければならなかったのか全く明らかにされてはいない。

四

ここからは第四段の「『彼女』の陳述と訴え」の場面である。

死んだはずの「彼女」が「私」の目の前に姿を現し、そこで「彼女」と「私」の会話が始まるという形式を取る。

○〈死後の彼女との最初の会話〉

以下は死んだ「彼女」との最初の会話である。

「君は独りでここに住んでいるの？」

「私はここに住んでいるのではなく、ここに住んでいるの、」彼女は私の胸を指さして言った。

「始終君のことを忘れたことはない、それなのに？」私は彼女の手を強く握った。

「他の人にキスをされているとき、心の中ではあなたを見ていたわ！」

「でも君は他の人がキスをするのを許したじゃないか？」私は決して少しの嫉妬もなかった。

「愛が心の中にあれば、唇だってじっとしていられないわ。どうしてあなたは私にキスをしなかったの？」⁽¹⁶⁾

ここでの「彼女」は「私」に「帰きなさい！」と言ったり、手紙に「返事はいりませんわ！」と言った人物とは別人のように饒舌かつ率直で「私」の胸に抱かれたり、「どうして私にキスをしなかったの」と発言したりする。

第三段の「私」の回想の場面とは愛情表現に対する考え方も明らかに違っている。この変化は、すでに死んでしまっているのだから、現世の諸々の規範からは全く「自由」であり、解放たれていると説明できるだろう。

愛していれば唇を求めることだって自然であるとするのである。もしこれが自然であるとするならば、かつての「私」たちの愛情表現の仕方は不自然だったということになる。

「どうしてあなたは私にキスをしなかったの？」に答えて、「キスをする」行為に踏み切れなかった理由を述べた文章が以下である。

「私は君のお父さん、お母さんを裏切るようなことが出来なかったんだ。だから南洋に行ったんだ。」

彼女は頷いた、「恐れがあなたに一切を失わせたのだし、離ればなれが愛の心を動揺させたのよ？」⁽¹⁷⁾

そのキスをする行為に踏み切れなかった原因を、すでに自由な立場にいる「彼女」は「恐れ」とし、その「恐れ」のために一切を失ったと私に告げている。「恐れ」という言葉で「私」の、以前の「彼女」に対する愛情表現の仕方を批判していると取れる。

「恐れ」を乗り越えるには勇気がいるわけであるが、それではその勇気とはどのような勇気な

のか。

これまで作品を見てきたように「私」は「彼女」を愛しており、「彼女」との交際に当たっては「彼女」が困った状況に陥らないように細心の注意を払っている。しかも「私」には「彼女」の「お父さん、お母さんを裏切る」ようなことができないという気持ちもあるのである。

このようなものを「恐れ」と批判するなら、それらを越えるためには、「彼女」が困った状況に陥るなどとは考えてはいけなかったし、「お父さん、お母さんを裏切る」ようなことをしても良かったということになる。相手の事情は全く考えず、完全に自分の都合のみで生きて行くそんな人物になる勇気が必要だと言っているのではないか。

しかし、一方の「恐れ」と批判した部分に存在する、人間の優しさ、思いやりをどう考えれば良いのか。これは人間にとっては素晴らしいものではないのか。実際に「恐れ」を乗り越えられなかった二人は、乗り越えられなかったが故に、逆に人に対する優しさ、思いやり、気遣いというものが一層輝いて見えるのではないか。このように考えると、実はこの「恐れ」も、特に人に優しくかったり、思いやりがあったり、相手を気遣ったりする人には、簡単に乗り越えることのできるものではないのである。

だがこういう人物だからこそ、この作品では、本当に愛しているなら「恐れ」を振り払い、勇気を持って、そこまで踏み込んでいかなければならないと、「彼女」は言っているのだと解釈しておきたい。

五

この会話の後に「彼女」が娼婦に落ちて行った経過が「彼女」の口から話される。以下がその冒頭になる。死後の最初の会話の「離ればなれが愛の心を動揺させた」に相当する部分だと思われる。

○〈私〉に似た男との結婚

「私」が南洋に行った後、母親が死に比較的自由になった。その際に彼女を追いかける男性が出現し、容貌が「私」に似ているということ、あるいはさらに肉体的な欲求で、その人物の「愛」を受け入れた。その結果どのようなようになったのが、次である。

彼女は一人の青年の愛を受け入れた。彼が私にそっくりだったからだ。彼はとても彼女を愛した。が、私を忘れられなかった。肉体の結合は愛の満足ではなく、そっくりの容貌で愛の真の姿を代用することは出来なかった。彼は疑った。彼女は自分の心が南洋にあることを認めた。彼らふたりの関係は切れてしまった。⁽¹⁸⁾

外見は「私」にそっくりであるから、「私」以外という点では、最も「私」に近い人物ということになる。だからその青年の愛を受け入れ、「彼女」も「私」を愛するのと同じようにその青年を愛しようとしたのである。だが、それはできなかった。「彼女」が「私」が忘れることができなかったからである。依然として「私」の方を愛していたからである。

このことを青年に「疑われた」のだ。そして、おそらく問いつめられたのであろう。その結果、「彼女」の「愛」の心がその青年にないことを告白して、二人の関係は切れたのである。

ただ、ここで確認しておきたいことがある。それは、何故「彼女の心が南洋にある」を疑われるに至ったかということと、二人の関係をどちらが切ったのかということである。これはある意味では自明のことであり、また作品にも特に何も書かれてはいないが、とくにこの作品の理解には重要であると考えられる。

この作品の時代背景である民国、しかも五四運動以前においては、女性側からすれば、多くの人がそうであったように、たとえ愛してはいなくとも嫁いで行った先の男性と何事もなく一

緒に暮らして行くことが一番良い選択であろうと思われる。ともあれ離婚は当時にとっては女性の生存にも関わるものであると考えられる。

だからその青年が「疑った」という一文もなにげなく書かれているが、時代、社会背景を考えれば、そのように疑われるのはかなり恐ろしいことなのである。

ではどのようにして疑われるようなことになったのか。それは青年でなく他の人を愛しているとその青年に感じさせるものが「彼女」にあり、それが「彼女」から知らず知らずに出てしまったと考えるべきだろう。決して「彼女」は故意に「疑われる」ようなことをしたとは考えられないのである。

青年は「彼女」に問いただした。そこで「彼女」は告白し、その青年の方が別れ話を持ち出し、「彼女」との関係性を切ったと思われる。やや極端に言えば、「彼女」は自分から決して別れるつもりはなかったのだが、その青年に捨てられてしまったと見る方が当たっているであろう。

当時の多くの女性がそうであったように、もし結婚した男性と何事もなく生活をしていくことができるというのを普通の女性の一番の「幸せ」と考えるならば、「彼女」はその「幸せ」を逃したということになるのである。その「幸せ」の邪魔をしたのが、実は「私」を忘れられないという心である。この作品では、この、当時の女性の普通の「幸せ」と、「彼女」の「私」を忘れられない「心」との関係も押さえておく必要があると考える。この関係は次のエピソードでさらに明らかになる。

○〈金持ちの御曹子との結婚生活〉

ちょうどこのようなとき、父親が財産を全部無くしてしまい、さらにアヘンに手を出してしまう。だからお金のために自分の身を売るような形で裕福な家の御曹子と結婚する。

「私は愛を心の中に仕舞いこんで、」彼女は言った、「肉体で稼いだご飯でそれを養ってい

ました。肉体が死んでしまったら、愛は存在しなくなってしまうということを深く恐れていました。でもそれは間違っていました。先にこんな話をするのを止めましょう。彼はとっても焼き餅を焼きました。いつも私にくっついていました。何をするにしてもです。どこに行くにも、彼はいつも後に付いてきました。彼は私の破綻を探し出すことは出来ませんでした。私が彼を愛してないということには気づきました。段々と、嫌いそれから人前で私を罵るようになってき、甚だしきに到っては私を殴るようになりました。彼は強引に、私が心の中に別の人がいるという事を認めない訳にはいかないふうにしました。我慢しても我慢しきれず、ご飯の問題も顧みることは出来ませんでした。彼は一枚の着物もあたえず、私を追い出しました。」⁽¹⁹⁾

このエピソードも基本的には、「私」にそっくりな青年との結婚のエピソードと同じ展開であると考えられる。この場合、確かに金のために結婚したのであり、「愛」とは関係ないようだが、実は金持ちの御曹子との結婚にも「彼女」の「私」に対する「愛」の心が絡んでいると考える。

まず、「私」にそっくりな青年との結婚のエピソードと違うのは、この結婚には生活がかかっており、自分から別れることは絶対になくということである。次に、そのためには「彼女」が「私」を愛しているということを絶対に知られてはいけないという点である。このように「私」にそっくりな青年との結婚の場合にはエピソードの背後に潜んでいたものが、この場合にはむしろ鮮明に前面に持ち出されているのである。

まず、「彼は私の破綻を探し出すことは出来ませんでした。私が彼を愛してないということには気づきました」に注目したい。ここで「破綻」と言っているのは、「彼女」が他の男性と密会とか、交際をしている証拠のことであり、金持ちの御曹子はそのようなことを疑い、その現場を見つけ出そうとしているのである。確かに

金持ちの御曹子には嫉妬深いという人格的な欠点はあるが、このような行為をさせるのは「彼女」にも金持ちの御曹子にそうさせるものがあったということにならないだろうか。もちろんこの場合、「彼女」が故意にそうさせるようにしたとは考えにくい。彼女自身は隠そうとしたのだが、いつの間にか「彼女」からそうさせるものが出てしまったと考えた方が自然である。

もしも「彼女」が「私」に対する「愛」を完全に捨てることができさえすれば、或いは最初から「私」に対する「愛」そのものがなければ、金持ちの御曹子の世話を受けられたらうし、そうなれば少なくとも金のためにあくせくすることだけからは免れたかもしれない。しかし、それができなかったのである。金持ちの御曹子は罵り、殴り、無理矢理自白させ、とうとう「一枚の着物もくれず」に「彼女」を「追い出した」のである。

ここにきて明らかになったことがある。

「彼女」は相手の男性に対する「愛」は無いけれど、その男性と一緒に暮らしていこうと思っている。否、そうしなければならぬと決心している。しかし、「私」を余りに深く愛しているが故に、「彼女」が一緒に暮らそうとしている男性の目の前に「彼女」自らの意志でコントロールできない「私」に対する「愛」が知らず知らずのうちに出現してしまう。これに相手の男性が気づいてしまうのである。こうなれば相手の男性は「彼女」を問いつめる。こうして「彼女」はこらえきれず、その事実を認めてしまうことになる。「私」以外の男性との結婚の破局はこのようにして起こっている。

この場合、もし「結婚生活」を続けていきたい立場に立つなら、まさに「愛」が「結婚生活」を阻む、或いは壊すという関係になっているといえる。その時には、その「愛」は負担であり、重荷になってくるばかりか、時には邪魔なのである。けれども、その「愛」は消えてくれないし、自らの意志でコントロールもできない。だから、結局「彼女」は「私」以外の、どの男性

とも永遠に結婚できないことになる。ここに、生活のために「彼女」が娼婦に落ちて行かざるを得ない理由が見えるのである。

そしてまた、「彼女」が「愛」によってこのような状態になっていることが分かれば、「私」が長い間南洋にいて、帰って来ないというのが、「彼女」にとってどれほど大きなダメージであったか、はっきり認識できるのではないか。

こういったところが、冒頭に述べた、「二人が愛し合っていたからこそ“彼女”は娼婦にならざるを得なかった」ということなのである。

○〈娼婦への転落〉

御曹子からは追い出されたのだけれど、父親は相変わらず、アヘンを買うお金を要求する。とうとう「彼女」は娼婦になった。娼婦というのは、「愛」という感情を介在させない肉体だけの男女関係、それを商売にするものであると言うこともできよう。

男女の関係の中に「愛」が介在しなければ、その男性との間に「私」への「愛」が立ち現れ、邪魔をすることはない。寧ろ誰に向かって「私」への「愛」のことを言っても平気であり、公言しても問題ないのである。皮肉なことに人からは後ろ指をさされる娼婦になった途端、その呪縛から解き放たれるのである。

しかし、この商売は余りに過酷で、不自然である。「彼女」は肉体がボロボロになり、精神は荒んでいってしまう。

「私」が南洋から帰ってきたのは、まさにこの頃なのである。

六

○〈自殺の告白〉

「私」の回想では、彼女の死は墮胎の失敗によって死んだことになっていた。ところがこの第四段では「彼女」の口から、実は彼女の死は自殺であったという衝撃的な事実の告白が行われる。ここにも「愛」が関わっている。

「私は自殺しました。」

「なんだって？」

「私は自殺したのです。私の命運はただあなたの心の中に住むことができるだけです、一首の詩の中に生き続けることができるだけです。生と死に何の区別がありませんか？墮胎の時、自分で手を下したのです。あなたが私の側にいれば、私はもう笑う術がないのです。笑わなかったら、どうやってお金を稼げば良いのでしょうか？ただ一筋の道があるだけです。死という名の。あなたは帰ってくるのが遅かった。私がもうちょっとでも死に遅れると、あなたの心の中に住む希望さえもなくなってしまいます。」⁽²⁰⁾

「彼女」の自殺はやはり「私」を愛しているからこそ行われたものであるということが出来る。自殺することで「私」の心の中に生き続けたいというのである。

しかし、「彼女」の、死ぬことで「私」の心の中で永遠に生き続けたいという願いは達成されてない。以下が「愛」の物語の最後にある会話である。

「でも僕はあの足を覚えてる。ちょっと見せてくれないか？」彼女は笑って、首を横に振った。

私は意地を張った。彼女の足を握り、靴下を引き下ろした。すると、肉のない白い、足の骨が現れた。

「行ってしまいなさい！」彼女は私を押しした。これからあなたと私は二度と会うことはないわ！私はあなたの心の中に住みたかった。でも今はもう駄目になってしまった。私はあなたの心の中で永遠に青春でありたかったのに！」⁽²¹⁾

靴下を脱がすというのは、ほとんど肉体的な交渉に近い意味合いを持つもののようである⁽²²⁾。だから、本文にある『彼女』の足を握り、

靴下を引き下ろす」行為に及ぶということは「私」がほとんど肉体的なものを要求していることになるのではないか。この行為に「彼女」は激怒し決別したのである。

「彼女」は「私」を愛しているからこそ自殺した。しかし「彼女」のこの考え方にも問題はあった。「彼女」は死んだのだから、「私」の心の中でしか生きられない。だから、「私」も「彼女」が心の中にいることで満足する必要があったのである。それにもかかわらず「私」はそれに満足せず、「彼女」に肉体的なものを求めてしまったのである。

ただ、ここでの幾らか唐突な「私」の荒々しい行為は、第三段での、「彼女」を気遣う「私」のイメージとずれるようにも思う。このような不調和に、作者の、一方にある、安易に自殺によって目的を達することを肯定することはできないという意志や、「愛」が精神的な結びつきに終わることに対するかすかな疑いが読みとれるのではないか。まさにこのような曲折に富む展開の部分が老舎の作品にある種の深みを与えていると考えられるのである。

結

第三段の「「私」の回想」と第四段の「「彼女」の陳述と訴え」という部分の「私」と「彼女」の「愛」に関わるところを中心に考察した。

第三段と第四段は「私」や「彼女」の心の中に「愛」があるが故に却って二人が不幸になっていくという「悲劇」になっている点では一貫している。だが、その「愛」の不幸への関わり方という点では微妙に異なる。

第三段では二人の「愛」がお互いを徐々に遠ざける方向に作用している。「愛」は本来二人が結ばれる方向に働くものである。にもかかわらず、結ばれないのは、その「愛」をねじ曲げるものがその社会に存在していて、結ばれたいと願う二人の間を引き離すようにしてしまうからである。愛していればいるほど、相手を気遣い、

気遣えば気遣うほど二人は遠ざかっていくことになる。「愛」から生まれた優しさ、思いやりといったものが、逆に二人を不幸にするのである。そして、その二人の「愛」をねじ曲げるものは当時の中国にあった社会通念、伝統的思想といわれるものであるといえることができるだろう。

第四段では「彼女」だけの悲劇が中心になる。ここでの「彼女」の「私」に対する「愛」は「彼女」の「私」以外の男性との結婚生活を壊す方向に作用する。ある人を本当に愛してしまえば、愛してない他の男性と結婚生活を送ることはできないのである。そして、この際の他の男性との結婚生活の破壊は、寧ろ「彼女」自身の意志によるものではなく、いわば自分ではコントロールできない、別の生き物のような存在である「愛」の意志によるものであると考えるべきであると思う。

当時の中国社会にあって女性一人で生きていくことは極めて困難であろうし、だとすれば愛してない男性であっても、その男性と一緒に生活していくことが最低限の「幸せ」であり、その女性もそれを望んでいるのであれば、この時の「愛」と「不幸」の関係は、その女性の「幸せ」を「愛」が阻んでいるということもできるのではないか。第四段で作者はこのような「愛」の微妙な一面を描き出しているのである。

特に第四段のような「愛」を使った作品の展開の仕方は、ほぼ同じ時期の短編小説『大悲寺外』『歪毛児』のストーリーの展開の仕方に類似していると思われる。⁽²³⁾ また、この種の「愛」の表現の仕方も中国の現代文学にあっては独特のようにも見える。このような点やこの作品で考え残した部分をさらに同時代の悲劇の作品、或いは以後の悲劇の作品と比較しながら考えてみたいと思う。(完)

[注]

テキストは『老舍全集8』（人民文学出版社・一九九九年）に収められている『微神』を使った。従ってこ

こに記載するテキストの頁は『全集』のものである。

なお翻訳は竹中伸訳「幻影——微神——」（『老舍小説全集6、老舍自選短編小説選』所収、一九八一年十二月・学習研究社）、池沢実芳訳「花影」（福島大学経済学会商学論集・第六〇巻第二号、一九九一年一月）、石田達系雄訳「幻影」（『老舍のロマン』学芸会ブックレット NO1 所収、一九九五年一〇月一日・文芸タイムス社）があり、また教科書として編集されたものであるが、相原茂編注『微神』（一九八六年四月、朝日出版）もある。さらに、筆者は見えていないが、池沢氏の「花影」の付記には一九五五年『北大中国文学』第五号掲載の無署名訳「微神」があるという。これらを参照させていただいた。

- (1) 老舍作品の「幽默」評価の歴史について拙稿「各種の老舍論——「ユーモア」評価をめぐる——」（『集刊東洋学』六〇号・一九八八年・一二六～一三三頁）で論じたことがある。
- (2) 拙稿の「老舍『老張の哲学』私論」（『集刊東洋学』五七号・一九八七年・一〇一～一九九頁）、「老舍『趙子曰』試論」（八戸工業大学紀要第九巻・一九九〇年・一八七～一九七）、拙稿「老舍『離婚』試論」（八戸工業大学紀要第一四巻・一九九五年・一八七～一九九頁）、「老舍『牛天賜伝』試論」（八戸工業大学紀要第一七巻・一九九八年・二七八～二八八頁）の「幽默」に関わる部分でこの点について述べた。
- (3) 伊藤敬一「『微神』と老舍の文学」東京大学教養学部外国語学科紀要（昭和62年3月23日）。この論文は中国語で書かれている。したがってこの引用文の日本語は筆者の翻訳によるものである。
- (4) 同上
- (5) 同上
- (6) 『微神』63頁。
- (7) 同上
- (8) 同(3)
- (9) 『微神』56頁。
- (10) 同上
- (11) 『微神』57頁
- (12) 同上
- (13) 同上
- (14) 『微神』58頁
- (15) 『微神』59頁
- (16) 『微神』60頁
- (17) 同上
- (18) 同上
- (19) 『微神』61頁
- (20) 『微神』62頁
- (21) 同上
- (22) この解釈に関しては、1994年、早稲田大学で行われた老舍研究会で口頭発表したとき、この点について言及したところ、数人の方に、この種の解釈があることの指摘を受けたことがある。

- (23) 藤井栄三郎先生の「老舎研究会」での口頭発表だったと思うが、『大悲寺外』『歪毛児』において主人公が、やはりしだいしだいに悲惨な状態においていくのだが、その悲惨への落て行く、墜ちて行き方について言及されたことがある。幾らか記憶違いもあるかもしれないが、主人公の心の中に、いわばキリスト教という「原罪」の

ようなものを主人公が背負っており、それがために悲惨に墜ちてゆくのだ、いわれたような気がする。老舎は一時キリスト教徒であったことは、現在ではよく知られている。特に『微神』の第四段の「愛」も何かそういったところに近い捉え方であるようにも思える。もっと考えてみたい。